

海外短信



～ シンガポール ～

国内営業30年・初の海外赴任

日本ピラー工業(株)

～沢山の外国人を受け入れている英語が公用語の国～

以下は、弊社の子会社”日本ピラーシンガポール”へ今春異動した社員のシンガポール滞在記です。

当社(日本ピラー工業)は1980年代より、シンガポール及び周辺諸国の石油精製、石油化学ユーザーや発電所で使用される回転機用メカニカルシール(軸封装置)の補修サービス、販売を中心に営業展開を行ってきました。日本ピラー本体からは主にエンジニア系の人材が交代で赴任し、現地営業スタッフとともに、お客様の声を聞き、地道に業績を伸ばさせて頂いてきました。これは諸先輩方が苦勞して積み上げられてきたお客様との信頼関係によるものと考えます。

1992年に現地法人を立上げて20年が経過し、グローバル展開強化の方針のもと、今年度、精鋭エンジニアとともに、事もあろうか国内営業30年の私が大役を仰せつかり、戸惑いつつ赴任して参りました。



【シンガポールのマリーナ・ベイ・サンズ】

転勤慣れはしていますが国内と海外の差の大きさを今さらながらに痛感しました。何か尋ねる、道を聞くなども容易ではなく、おしゃべりの関西人が無口になる辛さは我ながら笑えてきました。スーパーでレジのお姉さんの問いが全くわからず変な顔をされたり、中国人と間違われて一方的に何かをしゃべりかけられたり、懸命のジャパニーズ・イングリッシュが全く通用せず、身振り手振りで買い物をしたりと、戸惑うことの連続であります。しかし、時間と慣れという経験値は強力で数カ月たつと、なんとか通常の生活もできるようになり、本来の営業活動に取り組んでいます。

赴任して当地の現地ローカルの人達と接して、一番の驚きはほぼ皆さんが母国語と英語を操り意思疎通を図っている事です。シンガポールは最近でこそ、外国人の流入を制限していますが、70年80年代はヨーロッパ、インド、周辺諸国から多数の外国人を受け入れており、多国籍国家の感があります。主を占めるのは華僑の中国人とマレー人であり、中国語が幅を利かせているようですが、公用語となっている英語はしっかり定着しています。3歳くらいから英語に接し、生活の上でも必要が伴っている事が大きいように思われます。日本でもグローバル化から社内公用語を英語にとその必要性を強調されている会社などありますが、本当に必要にならないと身に付かないと、当地に来て痛感しております。日本も英語をと望むなら、少子高齢化でもあるので、日本人にこだわらず外国人をどんどん受け入れ英語を公用語にするぐらいの勢いがないとダメなような気がします。

東京都か淡路島くらいしかない国土に人口約540万人の国なのにその存在感の大きさはどこから来るのかと疑問に思っていました。この多国籍国家たることと理解しました。よく日本やアメリカでも国の在り方として小さな国家をと言われていますが、この国では即断即決でさっさと新しいルールが適用されている事を見ると、(多国籍国家たることを)そのまま体現しているような感じがします。それと華僑の方のしたたかな頭の良さかなとも思います。

機会があれば是非シンガポールにいらしてください。日本から6～7時間で来れますよ。